
君の知らない家物語

aoha

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

君の知らない家物語

【Nコード】

N4886I

【作者名】

a o h a

【あらすじ】

羽川を幸せにしたい物語。

”君の知らない物語”の第三弾。
今回は前後編でお送りします。

幸せに至る道は、痛みなしには語れない。

前編

「どうしよう、阿良々木くん」

羽川は常にならないような慌て振りでもくし立てるように言った。

「子供ができちゃった」

大至急。

そんな感じのメールを受け取ったのが午前八時三十分。妙な既視感を覚えながらも、指定された公園についたのが二分钟前。そして衝撃の発言を聞いたのがたった今。

午前八時四十八分のことだった。

正直な話。

電車に轢かれたような衝撃で、いくら打たれ強い僕とはいえ。突発ネタには弱い。八九寺流に言うならアドリブに弱い、ということになるか。

ともかく。

百戦錬磨の僕とはいえ即座に反応できないでいる。

そんなことよりも、羽川の表情に魅入っていた。羽川が本気で困惑している顔など滅多に見れるものではない。いつも、きびきびシャキシヤキしている羽川。それとは対照的におろおろと所在なげにそわそわしている姿など今世紀はもう見納めだろう。僕がその奇跡の唯一の目撃者だ。言うまでもないけど、そんな羽川も超可愛い。

「あの、阿良々木くん？」

「ああ、すまない、羽川。それで、僕たちの子供のことだっけ？」

「え？ あ、うん。ちょっと違う、かな？」

いや、羽川。そこは否定しておけよ。

僕たちはまだ健全なお付き合いのはずだ。

いろいろと誤解できそうなシーンはあったけど、ほんと、何もない。実はデートだってまだだ。お勉強会をデートと読み替えるなら、その回数はかなりのものになるけれど。というか、毎日？

でもそれは違うだろう。いや、違うと思いたい。別にメルヘンチックな理想があるわけでも、女性との交際に幻想を抱いてるわけでもないけど。

話を戻そう。

とにかく、子供が出来たらしい。誰のか？ 僕と羽川はそういうお付き合いをまだしていないから、僕たちではない。戦場ヶ原には何度も襲われたが、逃げ切った。神原は問答無用ではたき倒した。

アイツはヤバイ。リアルにヤバイ。実に犯罪的だ。出会い頭に押し倒されることがそう何度もあっていいはずがない。その昔、若かりし僕が八九寺に行っていたセクハラは巡り巡って僕に返ってきている。あの恐怖は本物だ。

ギラついた瞳。

荒い吐息。

支離滅裂な言動。

不意を突いての奇襲。

本気で泣きを入れて八九寺に土下座したのはついこの前だったか。

またまた話を戻そう。

つまりは、羽川の両親のことなのだろう。

「うん、お父さんとお母さんから。今朝、聞いたの。

今までのすまなかった、って。

今からでもやり直せないか、って」

簡単な話。

羽川家で再婚同士の両親の間に子供が出来て、それを機に気まずい関係を改善しようとしたのだろう。羽川は決して多くを語ることはないけれど。

「随分、都合のいい話だな」

「だよな。十年近く放っておいて、今更……」

そう言う羽川の表情は晴れない。

「本当に 今更」

苦りきった独白。

それは後悔か、郷愁か。

「どつするつもりなんだ、これから」

「どつもしないよ。私はなににも変わらない。今まで通りだよ」

「いいのか、それで」

「いいも悪いも、他にどつしよつもないじゃない」

どつしよつもない。

どつしよつもない、か。

春休みにも、同じようなことがあったっけ。

袋小路。

思考の迷宮。

堂々巡り。

「本当にどうしようもないのか？」

今のお前は春休みの僕と一緒にじゃないのか。死ぬしかない。太陽に身を投げるしかない。そう思い込んでいた僕とまるきり同じ。

できるわけがない。他に手段なんてない。そう思い込んでいるだけ。

「私が今までなにもしてこなかったと思ってる？」

「お前のことだ。考えうる限りのことを手段は取り尽したんだろう」

それこそ、考えうる限りを。

その結果として、羽川は傷を負いさえしたのだから。

「でも、今回は違うだろう。気持ちのベクトルが」

メンタルの違い。和解の意思があるかないか。それは大きな違いだ。

「まあ、お前が嫌だと言うならそれで構わないけどな。

そんなことは僕が羽川を嫌う理由にはしない」

「阿良々木くん、それは脅迫？」

「かもな」

否定はしない。

むしろ肯定。

でもな、羽川。僕はお前の恋人として、友達としてなんとかしてやりたいんだよ。それがたとえお節介だとしてもだ。

「でも、家族って悪くないモンだぞ」

お前が、一番良く分かっていることかもしれないけど。

ウチに居るときの羽川は、火憐ちゃんと月火ちゃんと居る羽川は、本当に楽しそうだから。ウチに来るようになってからというもの、本当に仲が良い。それこそ姉妹のように。そんな感じで僕がハブラれることも多くなってきた、それはそれは寂しい思いをしたものだが。

それを知っていてこんな話をしているんだ。知っていて、羽川を追い詰めている。その自覚はある。酷い悪役っぷりだ。

”家族”は羽川が唯一忌避し、目を背けてきたものだ。僕もそのことをよく知っていたからこそこの話題を避けてきた。問題を問題と理解しながら、放っておいたのだ。他人が口を出していい話ではないとか、羽川がそれを望んでいないから、とか。言い訳をして放置していた。

心地良い関係だけに甘え、浸ってきたのだ。お互いに。

「このままでいいなんて、思っていないけど……私だってそんなこと分かってるけど……」

それが分からない羽川ではない。

聡い彼女が、分からないわけがない。

問題なのは、春休みの僕と同じ メンタル。

「今更、どうしたらいいの」

十年。

十年だ。

その人生の半分以上を偽り、騙して生きてきた十年。

諦めが絶望に。絶望が憎悪に。そして諦観へ。

気持ちが変わってしまふのには十分すぎる時間。

生き方を変えてしまふには十分すぎる仕打ち。

一人で悶え苦しみ、押し殺して押し潰してのたうちまわって辿り着いた安定。それを根底から突き崩されようとしている。

僕や戦場ヶ原、神原が怪異に出会って変わった。だけど、羽川のそれは、変化なんてものじゃない。そんな生易しいものじゃない。いい。

革命。

全てを否定して、ひっくり返すことなどできようはずもない。自殺にも等しい自己否定だ。

「一体、どうしたら……」

でも。

羽川は強い。

天才とか、そういう意味じゃなくて。心が。芯が強いと思うからだから。

恐れ多いことだけど。

僕は叱咤する。

春休みに、あの薄暗い体育倉庫で羽川がそうしたように。

「逃げるなよ羽川。身も心も。多分、これが最後のチャンスだ。時間の間隙は埋めていける。それに」

「それに？」

「 弟か妹の未来がかかっている。お前だけの問題じゃない」

「 ……そんなこと」

「 なくないだろ」

反論封殺。兄妹のいないお前には分かってない。

「 仮にご両親が子供に苦手意識を持ってしまったら、その子はどうなるんだろうな」

これはかなりセコイ手だと思う。

羽川の弱みに付け込んだ、卑怯な手だ。

困っている人を放っておける奴じゃない。無責任なことのできる奴じゃない。

そんな振りをしているわけでも、繕っているわけでもない。それが羽川の本質だから。

厳しくも優しい、本当にいい奴だということを知っているから。

その恋人は人の将来を人質に取るような悪役だけだな。でも、だからこそ、こんな手も使う。

本気で”家族”と向き合って欲しいから。

「 僕は歪むと思う」

「 歪むって…」

「 お前は真っ直ぐだ。お前がどう思っているても真っ直ぐで正しい。でも、歪んでる。」

歪み歪んで曲がり曲がって真っ直ぐに立ち返っただけだ」

今、このときばかりは人間強度が欲しいと思う。人に嫌な思いをさせるのが分かっているのに、言わなければならぬ。

その点、忍野は容赦なかったなあ。スマートではないけど、ストリートな人だった。この話だって、忍野に言わせれば「全く。酷い歪みっぷりだよ、委員長ちゃんは」といったところか。「それに、阿良々木くんも甘いねえ。甘すぎてむし歯になっちゃうよ。一体、どこまでお人好しなんだか」とも。

僕は忍野のようにはなれない。どこまでも、甘い。でもな、僕はそれでいいと思ってるよ。

「お前は強いから、全てを認めて、受け入れて生きてこれたけどな。生まれてくる子供にまでその強さを求めることはできないだろう」

「私は、強くなんて……」

「お前は強いよ。お前の強さのお陰で、僕はまだ生きてるんだから」

「でも、私は……」

そつだ。こつという奴だから。

柔軟な癖に、妙に頑固で。融通が利かない。

「それなら、それでいいや」

完璧な人間なんて居やしないんだ。

「ただ、お前に励まされてる奴や支えられている奴らが居るってことよ」

例えば、僕とかな。その在り方に、どれほど影響を受けたか分か

らない。

火憐も月火だって。気付かないうちにお前に影響されて変わってきたように思う。

「……」

「その子にも、その強さを分けてやってくれ」

これは心からの願い。でも都合のいい、他人からの要望。そんなものが認められるはずもない。

これは牽制だ。

僕が欲しい言葉を引きずりだすための呼び水。

安っぽい、挑発。

普段なら、引つかかるような羽川でもないが今は普通じゃない。

不安定な羽川なら、騙せる。

家族のことを想っているなら…乗ってくれる。

ははっ、乗ってくれるだって。どこまで羽川頼りなんだか。

「そうだね…。そう、したいね」

俯いて、喉からなんとか絞り出した声は震えている。

「でも…それじゃ、私の気持ちはどうなるの」

びこ。

羽川の頭に三角が二つ。

耳だ。猫の耳。

「それが理想なのは、分かってるよ？ でも、そんなの私にとってはなんの意味もない。私は…気持ちの整理をつけたいだけ。この息

苦しさを、胸のざわめきを、やりきれなさを清算したいだけっ」

十年の苦しみ。

ストレスを発散させなければ。

GWの一件程度でどうにかなるものではなかった想い達。

それを吐き出したいんだ、羽川は。

やっと聞けた本音。

「そうしないと、私は前に進めない」

羽川の艶やかな黒髪が色を失い、白く染まる。編み込んだ髪が解ける。日中でありながら月光のように白い。

”障り猫”羽川の本音を代弁する、黒い白猫。満たされない想いを消化する猫。

同じ羽川で表と裏。

黒い白と白い黒。

忍野は言った。言うなればそれは二重人格なのだ。

白と黒、隣り合わせに存在しながら決して交じり合わない。

でも、今の羽川はその境目が極めて曖昧。聡い彼女は”もう一人の自分”にもどこかで気付いていたはずだ。ただ、認められなかっただけ。

両方の羽川を知っている僕には灰色にしか見えない。

二人の羽川は一人になろうとしている。背反していた二人は同じ方向を見ている。

姿形は白猫なのに、その瞳は優しい羽川の眼。歪で真っ直ぐな羽川翼。

「本当は、仲良くしたいよっ！でも、でも！！納得がいかない！！」

頭では分かっているけど、心が拒絶する。よくある話だよな。でもそれはただの八つ当たりで、別のことで溜めたストレスを発散できずにイラついているだけ。行き場のないエネルギーをもてあましているだけ。それを受け止めなければならぬ。捻れ曲がった想いを。

「よし。じゃあ、僕を殴れ」

なるだけ、なんでもないことのように。

「お前が満足するまで、心ゆくまでやれ。全部吐き出してしまえ」

「そんなこと」

「僕がそうしたいんだ。それになにもタダでは言っていない」
にやり。と不敵にふてぶてしく笑って見せる。

「代わりに、今度一晩抱き枕な。エロスありで」

涙さえ浮かべた羽川は微笑んで頷く。

「なんでも言うこと聞いてあげる。一生でもいいよ」

「その提案は刺激的だな。楽しみだ」

「信じてるから……」

……死なないことを。

「ああ、任せろ」

羽川が眼鏡を外す。

一瞬、微笑が交錯して顎が砕けた。

軽く意識が飛んで、倒れ込もうとする僕を拾い上げるスマッシュ（ボクシング用語）で目が覚めた。オープンングヒットにしてはあまりにも重い。というか、まだ首が繋がっているのが不思議でならない。そういえば、『はじめの一步』がマイブーム、なんて言っていたか。火憐ちゃん繋がりで。

スローになった世界。いい具合にシェイクされた頭でそんなことを考える。が、追撃の拳が鼻っ面に突き刺さり再び思考中断。たったの三撃だというのに深刻なダメージを負っている確信がある。再生とか関係ない、脳を揺らされた。運動機能喪失。

影縫さんほど鋭さがあるわけではない。神原ほどハイパワーではない。羽川の”猫”はそういう類の怪異ではない。

だが、しかし。

羽川なのだ。本物の天才が、拳を振るっているのだ。人体の構造を知り尽くした一撃は確実に急所に突き刺さり、確実な苦しみを約束する。

苦しみ。苦痛か。

数度の意識中断の狭間で妙な安心を覚えた。

別に殴られすぎて頭が変になったわけじゃない。直感、あるいは閃きた。どちらも同じかもしれないけど。

羽川が僕を殺すことはない。そんな確信。

羽川は両親を憎んでいる。でも、その憎しみは必ずしも殺意には結びつかない。GWに羽川は両親を殺しはしなかった。代弁者たる猫は殺さなかった。重傷を負わせこそのものの、殺しはしなかったのだ。

擦れ捻れた歪んだその情は。

親愛ではないのか？

そのやり場のなかつた想い　愛情の重さが、この苦しみか。全身に感じている痛みは、羽川の想いの転化なのか。そう思えば、この痛みも愛しく思える。この身に羽川の十年分の愛を受けていると思えばもはや赤面モノだ。ただし、万民向けとは言い難い。死んだ方がマシというくらい痛い。

内臓に的確にダメージを与えるべく打ち込まれる拳に苦痛の大絶叫を四重奏。骨格は軋みを上げて、砕ける音を響かせる。悶絶と悲鳴のオーケストラ。羽川指揮、奏者阿良々木暦でお送りしております。

「って、冗談にならんわ!!」

そう叫んだつもりだったが、声になることはなく唇の隙間から僅かに息が漏れただけ。

身体を突き抜ける衝撃。例えるのなら地震。震源地は僕。いや、もうなんていうか。痛みどころか全身の感覚がない。痺れているような感じだろうか。もはやどこを殴られているのか、どう殴られているかも分からない。

これも羽川の優しさか？　なんて考えてしまう僕は相当にイカれているのだろう。人が良いにも程がある。ああ、もう、くそ。今更ながら羽川に惚れ直し。しかも、こんなタイミングで？

愉快だ。実に愉快だ。笑える。もう最高に笑える。

感覚は断絶したまま。身体は必死の再生を続けているのかもしれない。なかつたが感覚の戻る予兆はない。自分の足で立っているのか、それとも羽川の拳に立たされているのか、という判断もつかない。

ただ、今も思考が中断していないという事実。それだけが生存の証明だ。

羽川に教えてもらった、西洋思想。デカルトだっけ。”我思う、故に我あり”の人だ。少しでも疑いの余地があるものを全て偽と定義し、数式や自己の身体が存在すらも否定しうると考えたデカルト

が唯一疑いの余地のないものとして、確実に在るものとして自己の存在を定義した言葉だ。まさにそんな状態。

そんな僕が断片的に得られる、もしかしたら錯覚かもしれない情報に依れば、只今空中コンボの真っ最中であるのだろう、というこ
とくらい。どうやら、比較的現実世界の物語から格ゲーの世界へと
シフトしたらしい。

しかし、羽川。お前、ゲームなんてやるんだな。十中八九、我が
妹たちに付き合っただろうが。しかも、随分えげつない。空中八メ
コンボですか。今度、是非とも僕とお手合わせ願いたいものだ。も
ちろん、ゲームで。

なんかもう全てが他人事に思えてきた。全身が殴打、乱打を浴び
ているのは分かるのだけど、現実感が希薄だ。実際にどれくらいの
ダメージを受けているのかも全く分からなくなってしまっている。

にもかかわらず心は静かだ。水鏡のように平らで、いささかの乱
れもない。このまま寝入ってしまったおうかという誘惑に駆られるほど
に。

それもいいかな、と思う。しかし、寝入ってしまうと雪山で遭難
したときのようなことになってしまおうか？などと取り留めのない思
考を弄んでいた時。

鮮烈な赤のイメージが疾駆った。

僕は半ば本能的にそれに手を伸ばし、美しき黄金を掴み取る。

鉄血にして熱血の吸血鬼。その成れの果て。僕がこの世に縛り付
けた存在。

忍。

突然の出来事にコンボは中断。僕は忍の首根っこを掴んだまま自
由落下。硬い舗装された地面に叩きつけられる。落ちるまでになら
りの浮遊時間があつたがそれについては考えないことにする。恐ろ
しすぎる。一体、何メートル打ち上げられていたのか、僕は絶対に
知りたくない。むしろ、そんな最中であつて忍を掴んだ手を離さず、
かつ抱きかかえることで落下の衝撃から守ったことを褒めてもらい

たい。動かないと思っていた身体も、必要に駆られれば意外と動いたりするものらしい。人体の不思議。この場合は驚異か？

「げふっ」

落下の衝撃と相まって盛大に血を吐いた。美しい金色を血で汚してしまった。

こりゃ、どやされるかな。と思ったが、今は忍を押さえ込むことを優先した。きつと、怒気を小さな身体にみなぎらせて暴れださんばかりだろうから。

幸いというべきか。血を与える前だったから忍に吸血鬼としての力はない。見た目通りのただの幼女だ。代わりに僕もちょっと死ににくい程度の存在でしかない。

瀕死。息絶え絶え。辛うじて死んでいない。ボロ雑巾。

今の僕の状態を表現する言葉は一ダース集めるのに事欠かない。掠り傷程度ならともかく、全身複雑骨折、内臓損傷多数というのは無理だろう。あくまでも想像だけだ。

それでも。

僕は死んではない。

みちみちと身体が再生する音が聞こえる気がして吐き気がする。

「忍。悪いな、相談くらいはするべきだった」

「生きておるのか、お前様よ！」

常にない切羽詰った忍の様子に笑いを隠しえない。今日は人の意外な面を見ることが多い日だな。

「死んではいないらしい」

髪を撫でる。

僕の血で赤く汚れた金髪がやけに美しく見える。壮絶な美しさというやつだ。

怒り心頭。小さな身体を震わせる忍が僕の首筋に牙を立てようとするのをやんわりと止める。

「止めるな。止めてくれるなお前様よ。僕は怒っておる」

「後でミスドで食い放題でどうだ？」

「このっ、戯けがっ！ そのような話をしておるのではない！」

至近距離で僕に食って掛かる忍。瞳の中で燦る炎は間違いなく本物。もしかしたら、このまま髪の毛が逆立って戦闘力が数百倍とかになったりするのだろうか。

だが。

「そういう話なんだよ、これは」

なだめすかすように髪を撫でる。服従の証として。嘆願として。

「羽川は癩癩を起こしてるだけだ。僕は恋人としてそれをなだめて
いるだけさ」

「しかし」

「頼むよ、我が主さま。これはただの痴話喧嘩みたいなもんだ。恋人
同士の睦み合いなんだよ」

これは壮大で凄惨な惚気話なのだ。

「……フン。そんなものに手を出した日にはヘッドレスホースに蹴られてしまっわ」

帰りにはミスドじゃ。それで手打ち。そう言ってふてくされながら忍は影に戻っていく。

「ありがとう」

僕のサイフが許す限り、食わせてやろうと思う。

なんて話をしている間に少しは動けるようになった。不協和音の大合唱は鳴り止まないが、無視できる範囲。

「すまない、羽川。とんだ邪魔が入っちまった」

のそり。

緩慢な動きで立ち上がり羽川と対峙する。

「阿良々木くん……。もう、やめよ？ 私、耐えられないよ。我慢するから、もっと頑張るから！ ……もう、やめよ？」

「逃げるなよ、羽川翼！」

僕は精一杯の気力を総動員して叱咤する。羽川は何も悪くない。

それどころか、僕を心配してくれているというのにそれを怒鳴りつけなければならぬ。この精神的な負担は辛い。苦行を強制し、なおかつ痛みを許容しなければならぬ。どんだけマゾいんだ。

それでも。

「ここで全てを清算しろ。二度目はない」

今この時を逃してしまつたら、もう二度と本当の羽川には会えない。そして、遠からず破局が訪れるだろう。そんな予感。そんな未来は願いたい。僕はもう羽川にベタ惚れで、彼女の居ない未来は想像できない。いや、したくないのか。

羽川の拳を握る手が震えている。

僕の痛みとは別種の痛み。火憐ちゃんが言っていたのと同じ痛み。心の痛み。

「弱気になつちゃ、いけないんだよね。逃げちゃ、いけないんだよね」

「そうだ。全部受け止めてやるから、任せろ」

「じゅめんね」

泣き笑いの羽川が再び動き出す。

一直線に。僕に向かって。

両の手が僕の顔に添えられ　　柔らかい唇が僕の頬に触れた。

「えっ？」

「じゅん」

疑問を感じた瞬間には羽川の拳が僕のこめかみを正確に捉える。角度、速度、僕の姿勢。ありとあらゆる要件が一致し、最大効率の破壊力を提供する。

首のあたりで嫌な音がした。

頸骨がイッた。そんな不吉な確信をもって僕は意識を喪失した。

後編（前書き）

君の知らない家物語。後編です。一ヶ月もお待たせしてしまいました
たが、どうぞー。

羽川家のお家騒動終了編です。

後編

鋭い痛みで目が覚める。

次いで頭痛と吐き気と倦怠感。爽快な目覚めとは程遠い気分。とりあえずは、生きてはいるらしい。しかし、視界は真っ暗。身体中違和感だらけ。全身これブリキのおもちゃ。

でも、まあ。
ともかく。

生きているようなので良しとしようか。気分は最悪なのに、それがどうでもよくなるような心地よさを感じているのがその理由。ふわりと香るよい匂い。

確かに感じる柔らかな温もり。
全てが僕を柔らかく眠りに誘う。

「もう少し、寝てていいよ。ちゃんと起こしてあげるから、ね」

福音。

慈しみに満ちた羽川の声。

全てを許容し、包み込むような確かな温もり。
何かが明確に変わった、そんな感じ。

”何が”とは言えない。僕には当然。羽川にだってきつと分かっている。

なにもかもが想像でしかないけど。僕のフィーリングでしかないけど。僕が思うに、羽川はきつと克服したのだろう。
自分の過去を、とりあえずは清算できたのだろう。

よかったな、羽川。

でも、悪い。お言葉に甘えてもう少し眠らせてもらう。もう少し、この心地よさに浸っていたいんだ。

* * *

目が覚めたのは夕方ごろだと思う。なんでそんなに曖昧なのかというと、瞼の裏に感じる日差しの強さとか、空気の感触から判断するしかないから。なんたって、目が開かない。口も動かない。当然のように身体も動かない。どうなってるんだ？

「阿良々木くん、動いちゃだめ」

羽川の声が上から降ってくる。

動くな、と言われても動けないんだが。なんか弾力的で温かいものが頭の下にあるような？

僕はいったいどんな状態なんだ？

「教えてやろうか、お前様よ」

あれ？ 忍？

「ちよ、ちよっと忍ちゃん…」

焦り気味の羽川。

それだけで聞きたくなくなってきた。

「今のお前様は不死力がほとんど尽きておる。正確には重傷を回復して尽きた、というべきかのう。儂とて、死を覚悟したぞ」

儂とお前様は繋がっておるのを忘れておったじゃろう。かかか、

と笑つ忍。

伝説の吸血鬼をして、肝が冷えたと言わしめ、大幅に力を減じたとはいえ殺しかけたのだという。どうやら、本当にギリギリで助かったらしい。あるいは助けられた。

「それでお前様は全身打撲で眼鏡の女子に膝枕されておるといわけじゃ。なかなか良い感触じゃろう、お前様よ」

膝枕か。

なるほど、この至高の感触はあの肉付きの良い太腿か！ ついついパンツにばかり目がいつてしまっていたが、記憶に妬きついた映像を反芻してみればあの健康的な太腿も芸術的な美しさがあつてそそられるものがある。その太腿が、僕の頭の下に、布一枚隔てたところにあるというのか！

「阿良々木くん」

氷点下。

絶対零度。

バナナで釘を打つどころか、お互いに砕け散りそうな冷たい声。

一瞬、神の存在を確かに感じさせた福音の如き柔らかな声はどこへ！？

「あ・ら・ら・ら・ぎ・く・ん」

はい。

ごめんなさい。

反省シマス。

というか、羽川。なんでお前には僕の考えていることが筒抜けなんだ？ 素朴な疑問。

「かかかかかっ」

愉快そうに大笑いする忍。

てめえ、後で覚えてろ。

「そう言ってくれるな、お前様よ。儂とて動けんのじゃから」

ま、直接殴られたお前様ほど酷くはないがの、なんて。

あー、うん。なんていうか。本当にごめんなさい。

っーか、なんだ。僕が影縫さんにボコボコにされたときですら平然としていた忍が、ノックアウトするって、マジでなにがあったんだ。

「ああ、それにしても良いのう。たまらんのう。この膝枕というやつは！」

膝枕ツイスト状態かよ。

でも、まあ、いいか。気持ちいいし。

殴られた甲斐もあったというものだ。

しかし、惜しむらくは羽川の姿をこの目で見られないことだ。膝枕というシチュエーションは、かなりきわどいアングルから見上げることになる。羽川の豊満ボディならばさぞ圧巻であろう。

「俗物めが」

あはは。男の浪漫というやつだ。晒いたければ晒えばいい。止めようと思っ止められるものでもない。

「ま、それもしばらくは叶わぬであろう。お前様の顔は水死体もか

くや、という有様じゃからのう。ますます男前が上がるというものじゃ」

くくくく、とわざわざ笑いを我慢されているのも気に入らないが、とにかく状況はつかめた。つまりは、眼も開かないほどにまぶたやらなんやらが腫れ上がっているということらしい。いつもなら、その程度すぐに治癒してしまうのに、不死力のほとんど尽きた今ではそれも叶わない。

でも、それが普通なんだ。傷は簡単には治らない。…それでも、常人の倍以上のスピードで回復しているのだからうけど。

「お前様を心配するわけではないが、今しばらく眠っておるがよい。日が沈めば、治りも早まるう。儂も眠る」

極上の枕もあることじゃしのう。それっきり、忍は沈黙した。

僕も、身体も口も動かない以上、何も出来ない。眠ることにしよう。小粋なジョークも口に出るなければ僕がおきいても仕方が無い。忍じゃないけど、最高の膝枕に身を任せて眠るのは良い提案に思えた。

悪いな、羽川。さつき起きたばかりなのに、もう一度眠るよ。

「おやすみ、阿良々木くん。忍ちゃん」

* * *

ようやく、人並みの目覚めを迎えたのはすっかり暗くなってからだった。でも、相変わらず頭の下には確かな温もりがあつて幸せな

気分になる。

はじめに視界に入ったのは羽川の晴れ晴れとした表情　　がよ
かったのだが、そうはいかなかった。涙の後の残る頬と、泣き腫ら
した赤い目をした羽川だった。

「ごめんね、阿良々木くん。私のせいでこんな目に合わせちゃって」

「え？」

「本当に、ごめんなさい…」

ぼたぼたと涙が顔に落ちてくる。

「私が弱いから、こんなことに」

今頃になって、後悔をしているのか？安っぽい挑発に乗って激発
して、感情の赴くままに力を振るったことを？それを自分の弱さの
せいにして、自分を責めているのか？

それはお前の美点だが、弱点でもあるな。

「羽川、勘違いするなよ。これは僕のエゴなんだから」

全くもって、お前が責任を感じる必要なんてないんだ。ただ、僕
が家族は仲良くあるべきだ、なんて安っぽい理想を振りかざしてお
前に和解しろ、と迫っただけの話。その和解の交換条件として僕が
羽川の感情の捌け口になっただけのこと。GIVE & amp; TAKE
KEの関係だったはずだ。

ああ、でもこれは僕から見た話か。羽川はきつと違った風に見え
ているのだろう。そう、いつか僕が羽川に言った”自己犠牲”。

これは春休みの逆回しなんだ。僕にとって当然の行動も、羽川に

はとんでもない犠牲を支払った献身に見えただけの話。僕にとっては当然の行動だったのに。だったら、僕が言うべきセリフはは決まっている。

「僕はな、羽川。相手のために死ねないのなら、僕はその人のことを友達とは、ましてや恋人とは呼ばない」

初めて聞いたときはなんて乱暴な定義だと思った。でも、今はそれが当然。当たり前になっっている。自慢にもならないけれど、僕は火憐ちゃんや月火ちゃんと違って友達は多くない。そんな友達を助けるためには命を賭けるのは当然。そんな気持ちの変化が妙に嬉しい。

「それは、自己満足ってこと？」

「ああ、自己満足だ」

「それじゃあ、仕方がない…ね」

震える声で、僕たちは確認する。

新たな涙が頬に落ちてくる。なんとなく、僕はそれをなめとった。ん。しょっぱい。

「ごめんは、もう言わない。ありがとう、阿良々木くん。でもね、なにかお礼をさせてほしいな」

涙をぬぐいながら微笑みかける羽川の表情に憂いは全くない。涙の後も、赤い目もそのままだけ。

「自己満足？」

「うん、自己満足。私が、そうしたいの」

「じゃあ、キスで」

冗談半分。

でももう半分は本気。

意識をなくす前に一瞬触れたあの感触をもう一回、なんてそんな悪戯心。

でも、そんなことを考えている間に僕の唇は塞がれていた。

返事の代わりに。

緊張なんてする暇もなく。

羽川の唇の柔らかさをたっぷり感じることも数秒。羽川の唇が離れて、熱っぽい息が漏れた。二人の吐息が混じる距離。

「もう一回?」

「もう一回」

今度は不意打ちでもなく、変な緊張もせず、ゆっくりと唇が重なった。長いようで短い数秒を共有して、再び離れた。

二人、赤い顔で笑みを交わす。

「阿良々木くん。本当に、ありがとうね」

なんか、いろいろすつきりした。そんな顔。

いい表情だった。

「私、お父さんとお母さんと話してみる。今なら、できる気がするから」

「そっか」

「うん。そこで、お願いがあるんだけど。いいかな？」

「ああ。なんでも言ってくれ」

「ありがと。あのね、電話を繋いでおいて欲しいの」

一人だと、ちょっと怖いから。

「電池が続く限りはな」

「ありがと」

その程度のことですら安心できるのならお安い御用だ。

「よっし！」

羽川は小さくガッツポーズを取って気合を入れる。

「それじゃ、早速行ってくるね。何も言わずに飛び出してきちちゃったから心配しているかもしれないし」

「ああ」

そうとなれば、身を起こさなければなるまい。羽川の膝枕は大変に心地よくて、名残惜しいのだが。…お前の決意を鈍らせるにはあまりにも下らない理由だな。

「あだだだだだっ」

身を起こしはしたものの、全身が引き攣る。

久しく忘れていた感覚。日頃から運動を心がけるような殊勝な人間でもなく、鍛えもしていない僕。そう、全身筋肉痛。吸血鬼の身体になってからは全くご無沙汰だった。

「ごめんね、阿良々木くん。後で電話するから」

そんな僕を知ってか知らずか。

あ、謝っちゃいけないんだっけ。それでもやっぱり小さくごめんね、なんて言って。軽く頬にキスをして羽川は駆け足で公園を飛び出して行った。それこそ、名残りを惜しむなんて一切なく。残像を残さんばかりの高速移動。もしかしたら神原とも張り合えるんじゃないのか？

きっと、決意が鈍らないうちに、ということなのだろう。物怖じなんてキャラじゃないけど、家族だけは別だ。羽川にとってはずっと鬼門”だった”。

そう、過去形。

きつと明日にはなんとかなっている。なんとかしてしまっているだろう。

「お前様よ。少し話がある」

背中に軽い荷重がかかる。多分、忍が乗っかっているのだろう。

「我が主様。もう少し段階を踏んでからご登場いただけるとありがたいんだが」

誰も居なくなっただけ、と思っただけ、とどこにいきなり声をかけられるの

は精神衛生上よろしくない。忍が影の中に居るのは分かっているのだから、厳密には突然ではないのだが意識が向かなく事だつてあるわけで。

「ふむ。難儀じゃのう」

ふむ。もう一つ瞑目して、思案顔。そして。

「こんばんわ、阿良々木さん。いい夜ですね」

にぱっ、と眩しい笑顔。

「八九寺の真似ならちゃんと噛めよ!？」

全く。いきなりとんでもないことをしでかす奴だ。

「ふむ。お気に召さなんだか。儂が言うのもなんじゃが、かなり可愛いと思つたのじゃがな」

すごい自信だ。

いや、実際にかなり可愛いんだ。だけどそれは客観的に見ての話。僕の情動になんら働きかけるものはなかった。というか、ついさつき恋人と口付けを交わしたというのにすぐに他の女の子に目移りとかありえないですから。そんなやつがいたらとりあえずぶん殴ってやりたい。

「鏡が必要かの、お前様」

「ん？ 顔の腫れはもう引いたし、いらないけど？」

「そうか…」

たまに変なことを言うなこいつは。
まあいい。それはともかく、だ。

「で、話って？」

「うむ。お前様にはこれだけは伝えておこうと思っただけ」

すつ、と目を細めて忍が僕を見る。

子供っぽい外見とは違う、大人の雰囲気。全てを悟りきった、そんな無我の境地を思わせる空気。

「僕は今の生活に満足しておるよ」

まどろみにも似た、退屈で空虚な日々を。

「気まぐれに人と戯れることも、日の下を歩いてみることも、下らぬことに考えを巡らせてみることも」

天上の世界から、地上に降り立ったかのような。

「悪くない、と思っておる」

迷懷。

「じゃが、失って惜しいとも思わぬな」

お前。

それは。

「忍、お前、まだ死にたいのか？」

決定的な言葉。

いつかはつけないければならない”けじめ”。

羽川は”けじめ”をつけに行つた。

忍、お前は僕にも”けじめ”をつける、とそう言っているのか。

それとも、ただ僕がその言葉の意味を勘繰りすぎているだけなのか。

「どうじゃろうなあ。さほど、生き死にに関心がない故な」

ロリなくせにやけにアダルトイな忍。その真意を僕は見抜けないでいる。演技なのか本音なのか。

「ま、その時になってみねば分からぬのう。儂には前科がある」

死を超越した存在でありながら死を恐れ、血の涙を流しながら助けを求めたのも忍の偽らざる姿の一つ。僕が、忍を退治すると心に決めながら殺せなかつたように。

人の心は移ろいやすいもの。

つまりはそういうこと。

「分からないなら、分からないって言え」

「分からん」

言われてしまった。

「じゃが、覚悟だけはしてあるよ。儂はいつお前様に殺されて構わぬ」

「お前……」

「お前様一人の話ではない。あの娘と寄り添っていくのであれば、いずれはせねばならぬことである？」

言い返せない。

僕の身体は普通ではない。限りなく人間に近い怪異なのだ。

”人間ではない”ということ。

人ならぬ身で、人と共に生きることは出来ない。忍はそう言いたいのだろう。

それでも。

それでも、僕は。

「ま、好きにするがよい。しかし、忘れてくれるなよ、お前様」

自分で選んだことだろう？忍はそう言っているのだ。

僕は被害者ではなく加害者で。

どのように決着をつけることになるかと、僕は永久に咎を背負い続ける罪人だ。

忍に言われるまでもない。今は結論を出せずにいるけれど、いつかははじめをつける。

羽川ははじめをつけた。

次は僕の番だろう。

「忘れるもんか。僕はお前を許さないし、お前も僕を許さない。分かっているさ」

「…分かっておれば、それでよい」

この話はここでおしまい。とばかりに、忍は話を切り替える。

「あの娘、ハネカワといったかの？ あやつは、人間じゃったな？」

「え？ ああ。怪異は猫であつて、羽川じゃない。お前も知ってるだろ？」

春休みに、羽川の猫を退治するのに力を貸してくれたのは他ならぬ忍だ。

むしろ僕としては忍が羽川の名前を覚えたということが驚きに値するのだが。

「僕は、あの羽川という娘が恐ろしい」

「は？」

衝撃発言。

500年の時を生き、生きた伝説として語られる怪異の王。鉄血にして熱血しにて冷血の吸血鬼。その成れの果てとはいえ、忍の口から”恐ろしい”などという台詞を聞くことになるうとは露ほども思っていなかった。

「僕は、初めて人間を恐ろしいと思った。餌としか思っておらんかった人間を、じゃ」

杭に聖水に十字架。

吸血鬼の弱点は数多くあるけれど、そのいずれも恐れない忍が、そのいずれもをもたない人間、羽川を恐れるというのか？ 俄かには信じがたい話だ。

「吸血鬼殺し」

そう言ってもいい。

震えながらに忍は独白した。

「儂ら吸血鬼は、攻撃力に比べて防御力が低い。それは不死力が防御力に代わるからである、と」

その防御力は。

実は水増しされているのだという。

「強力な打撃を受けた部位は、霧と化して元の場所に戻る。」復元する”。お前様も覚えがあるじゃろ

「

確かに、その通りだ。吸血鬼は自分の身体を霧にして移動することが出来る。その応用があのだ。僕はあれを復元だといったけれど、まさにその通りだったのだ。実際に再生している部分のみ不死力を消耗しているというのならまさに水増しされているということになる。そう考えるとなんかせこい気がしないでもない。

「最も、儂ほどの力を持っておらねばそんなことはありえぬがな」

再生することなく死ぬ。そういうことなのか。

そういえば、ドラマツルギーは再生に随分かかるといつていたっけ。復元力も再生のうち、ということか？

「うむ。それをあの娘は…」

夕闇の中、忍の顔色は青い。もとより白い肌だから、もう真っ青

と聞いていくらい。耳元でかちかちと、歯が音を立てている有様

「知ってか知らずか、器を壊さずに中身を破壊しにかかったのじゃ」

中身、とは内臓のことだろう。内臓をぶちまけるほどの攻撃力、というのもぞつとしない話なんだが。僕自身も経験した話。内臓をぶちまけるどころか、頭蓋を粉々に砕けるのが怪異のパワーだ。しかし、そのパワーを内部破壊にのみ向けたとき、どうなるかは想像に容易い。内臓がめちやくちやに掻き回されてミンチになる。内部破壊では霧になって復元することもできず、不死力を消耗して再生しなければならぬ。更に一瞬で”復元”するからこそ痛みが一瞬で済むのであって、内部破壊系の”再生”を強制する羽川の戦術は並々ならぬ”痛み”を伴う。しかもそれは不死力の続く限り、延々と続く。痛みを受け入れ続けなければならぬのだ。

身体特性は不死不滅の名を冠する吸血鬼であっても、その精神が痛みを許容できるかは別問題だ。いかに化物であっても、そのベースは脆い人間。悠久のときを経て、痛みすらも飼い殺しにした存在でもなければ壊れてしまう。

ましてや人間は痛みに弱い生き物だ。生きたまま内臓をミキサーにかけられるなど、身の毛がよだつどころの話じゃない。

「普通、怪異同士の戦いではそのようなことはありえぬ。我らのやり方は本来、生々しい力のぶつけ合いでしかない。そんな器用な真似はできぬよ、我らにはな」

それを、羽川はやった。猫の身体であれば僕を吹き飛ばすことくらいは簡単だったはず。いや、加減しなければそうなっていたはずだったのに。

そうはならなかったのだ。

羽川が加減した。もっとも吸血鬼に効果的な方法で攻撃を行った。

それはいい。問題なのはそこじゃない。忍がトラウマを覚えるほどの残虐行為には薄ら寒いものを覚えるが、僕が気にしているのはそこじゃない。

羽川は全てを吐き出すことができたのだろうか。

僕はすぐに意識を失ってしまったからあいつがどんな想いでいたのかは分からない。

あの羽川のことだ。自分のことより他人の心配をして遠慮してしまっただけかもしれない。

そう思うと自分の不甲斐なさに腹が立ち、そして怖くなる。

自信過剰で、軽率だった。

あまりに不用意に人の心の闇に踏み込みすぎた。羽川の積年の想いを受け止めようなんて大それたことをしようとしたのだ。それは僕の意思には間違いなかったのだけどあまりにも無力だった。ただか数十年の人生経験しかない若輩者のくせに。羽川ほどの能力もありはしないくせに。

それでもなんとか生きているのは吸血鬼体質のお陰。僕が機転を利かせたわけでも知恵を使ってなんとかしたわけでもない。

僕の方ではない。

ただ、本当に運が良かっただけの話。

運良く羽川の気持ち晴れただけ。あるいは羽川に助けられただけの話。

「ほんに、のう。生きておるのはお前様の幸運とあの娘の器量のお陰じゃな」

はあ。

正論過ぎて言葉もない。改めて考えても、気が大きくなっていたと思う。

羽川と一緒に過ごした日々の中で、僕は賢く、強くなったつもりでいた。それが自信過剰。

愚昧。愚行。無知。愚か。

「マジへこみだなあ」

ひよとしなくても馬鹿なのだろう、僕は。

いつもいつも後悔ばかり。後になって”ああすれば”、”こうすれば”。

あれれ？でも意外と僕は悔やんではないかも。思い返してみれば色々とケチをつけたりはしても、悔いてはないように思う。強いてあげるなら春休みのことくらい。それすら今は悔いとは思っていない。

ああ、だから僕は繰り返すのか。死ぬような目に会っても、なんとなくやってしまったから。何度も繰り返すのか。取り返しのつかない過ちを犯すまで？

度し難い阿呆だ。

救いようのない愚か者。

「これはでっかい宿題ができたなあ」

どうせ、この性格は変えられないだろうし。ならば、羽川と同じ高みにまで登りつめるしかない。全てを見通すかのような、あの境地にまで。

すぐ傍に目標があるのはいいけど、でかすぎるな。しかし、頑張るしかない。

「そういうことじゃ。学習能力の低いお前様のことじゃ。いつまでかかるか、全く想像もつかん」

言って意地悪な笑み。清々しいまでの大笑い。

いい気分だ。ボロボロの割には悪くない。僕も忍に釣られるよう

に笑う。

次はもっとうまくやってみせるぞ。

今に見ている、愚か者の僕。

二人の笑声に唱和するように、携帯が鳴った。

後編（後書き）

おつかれさまでした。

君の知らない家物語完結です。

なんだか、最初から最後までシリアスで通してしまいました。しかし、この問題は二人にとって決して避けては通れない道だと思いません。

極めて個人的な妄想ではありますが、羽川さんの家はこれで解決。さて、次はどうしようかな。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4886i/>

君の知らない家物語

2010年10月9日20時14分発行